

「この場所を」

2009/07/20

大概ひねくれ者なのだ。

何の事かと言えば自分自身の事。

自覚くらいはきちんとしているつもりでいる。一応、それくらいは。

その上で僕は、この振る舞いを変えることは出来ないのだらうと思うのだからもう、仕方がない。

この位置を、譲るつもりは毛頭ない。

単純な、それだけの話なのだから。

たまたまた、という言い訳を他の誰でもない自分自身の為

に用意していた。それをもう何度になるかも判らないくらい胸の内で繰り返し、懐に仕舞った真新しい筆記具の存在を確かめた。

朝、書き物をしようとした時に墨が残り少ない事に気付いた。

それで昼前に家を出て、ついでに筆を新調しようかと悩み、随分と長居してしまったように思う。

しかしおかげで気に入るものが見つかったため、気分は悪くない。

だからだろうか、帰り道を少しずらしたところに、あの人の家があることを思い付いたのは。

自然と足がそちらに向かっていた。

たまたまなのだ。帰り道は他にもいくつかあったのだが、それらには目をつむってしつこくそう繰り返す。

どうせ帰り道の途中、大した手間ではない、ただのついでだと、もう何回も。

日差しは強く照り付けていて、短い影がくつきりと濃く足元を這う。

じりじりと灼かれてひび割れた地面を、土埃を立てて歩いた。

最初に聞こえてきたのは調子外れの鼻唄だった。

恐らく歌だと思っけれど、何の歌かまでは判らない。これ

は別に僕がそちらの方面に疎いからではなくて、単に音が外れ過ぎてゐる為だと主張したい。

戸を叩いて呼び出す前に、僕は歌の聞こえた庭をのぞいた。そこに柄杓を振り回し、怪しげに踊るオッサンを見つけて一瞬、本気で他人の振りをして帰ろうと思つた。

よく見ると変なオッサンであるところの芭蕉さんは逆の手に手桶を持っていた。柄杓をその中に突っ込んで、また同じように腕を振る。

ば、と水が散つて光を弾いた。

水の重みだけ花や草が揺れて、どうやら水やりをしているようだ。

でも水の撒き方は雑でむらがある。乾いたままの部分もあれば、ほんのりと水溜りになつている部分もある。

いつかあの花は枯れる気がする。でも芭蕉さんは気にした様子もない。たぶん気付いてもいないのだろう。

そんな風に、水やりという簡単な作業にもかかわらずいつもの駄目男っぷりを遺憾なく發揮する芭蕉さんに、ほつとするような、溜め息を吐きたくなる様な、複雑な心持ちになる。

ふらりと軽い足取りで芭蕉さんが向きを変えて、僕から見える部分が背中から横顔に変わった。

まだ芭蕉さんは僕に気付かない。

相変わらず全くなつていない水やりを続けて、だから僕はそのままその様子を観察していた。

腕が振るわれて水が飛ぶ。

草花が揺れて、反射の加減が変わつてたまにちらりと目に

差した。

眩しさにそつと目を細める。

芭蕉さんは水を撒きながら、ずっと唇も動かしている。細く小さく何かを口遊む声はずつとする。

改めて耳を澄ませてみると、それは言葉の羅列だった。

古い和歌、流行りの連歌、それから自分の句。

その一部分の五や七文字を、思いついたまま適当に、並べているだけなのだ。と。

ただ言葉を並べて、遊んでいるだけなのだ、と。

それでも気が付いたときにそれは訪れた。

ざ、と鳥肌のような感覚に目を閉じて、僕は世界を巻き込む音を聴いた。

ふわりと柔らかい空気だった。

じりじりと灼き付けるような日差しさえも緩やかだ。

ここは木陰のような優しい場所。芭蕉さんを中心に、広がつていく世界の音。

それは撒かれた水の様に、放たれ、伝わり、僕まで届く。低くもなく高くもない、かき消えてしまふような微かな声

がずつと世界を紡いでいる。

それは波紋。それは歌。

心の様に夢の様に、世界を紡ぎ出す尊い、音。

あんたの描く世界を知りたいと思つた。

一方でそれは無理なのだとも諦めていた。

僕なんかでは届かない。僕なんかが届くものであつて欲しいくない。

それでもこうして、あんたが時々落としてくれるものを拾い上げては大切に愛でることは出来る。

僕の世界は自由だから、僕は僕なりに、あんたの言葉で瞼の裏に世界を描く。

せめて、それくらいの自由を持つていると信じて。

深く刻み込むように強く思つた。

ここは、木陰のような優しい場所。

ふと右手で触れてみた頬が緩んでいて、どうやら僕は微笑んでいる。

「あれ、曾良君？」

ぱつと目を開いたら、芭蕉さんの目がしつかりと僕を捉えていた。

どうも、と応える声が平坦だ。顔にはあつという間に通常通りの不機嫌が、反射的に張り付いている筈だった。

きつと笑みには気付かれない。安心して、同時に少し何か

が残念だった。何がかは判らない、そのあやふやさが不機嫌を後押しする。

芭蕉さんは手桶を足元に置いて、空の柄杓をぶんぶんと振り回した。どうやら浮かっているらしい。

この家にはあまり人が来ないようだから、とにかく来客が嬉しいのかもしれない。そう思うことにして押し黙つた。

どうしたのー、と柄杓を振りつつ芭蕉さんがこちらに寄つて来ようとする。

芭蕉さんが僕の方に足を踏み出して、手桶に見事に足を突っ込むのを、確かに見た。

あ、と思つて、実際に声にも出して、でもそれ以上何を言う事もできない。

次の瞬間には芭蕉さんがもう転がっていた。

珍しく驚いて呆然とした。もちろん芭蕉さんだつて驚いている。

倒れ込んだ姿勢のまま、何が何だか判らないといった表情で、ひたすらに呆然と動けないままである。

ああ、まずい。

と思つた時にはもう、大抵遅い。

く、と喉が引きつって、そのまま短く声を立てた。

喉の奥が引きつってどうしようもない。何とか堪えようと口元を押さえてもさほど効果がない。

びつくりしたように見上げてくる芭蕉さんの顔、間が抜けていて、余計に腹の底が揺れるのだ。

「転びますか、今、この状況で」

だつて今さつき自分で置いた桶でしょう、と。

言う自分の声も震えていて、喉の痙攣に言葉が途切れた。

そこに馬鹿にした響きを感じ取ったのか突然、何おう！と芭蕉さんが怒った。

猛然と立ち上がるうとして、また、転んだ。

片足を手桶に突っ込んだままだから当たり前だ。やると思つた。予想通りなのに、どうしようもなく笑えてしまう。

芭蕉さんはもう悲痛な声で、そもそもずっとそこにいる君が悪いんだろうと言ってくる。なんて立派な責任転嫁だろう。勝手に芭蕉さんが転んだだけだというのに、あろうことか僕のせいにするなんて。芭蕉さんの癖に生意気だ。

いるんならさつさと声かけてよ！ そう叫ぶみたいに言う声が哀れで、僕は気付かないあんたが悪いんでしようと平然と言いつつ。

気付いてくれるのを、ずっと、待っていたんですけどね、と。

情けなく眉を垂れた芭蕉さんは下を向いて、くそう、と悔しげに呟いた。

その様子に胸の内が満たされて深く息を吐く。

ようやく僕は芭蕉さんの元に行き、まずは足元に回つて問

題の手桶をさつさと外してその辺に放つてやる。

それから正面に戻つて、手を差し出した。

きよとんと見つめられてしまつて、居心地の悪さに思わず柄杓を奪つてそれで頭を殴る。

涙目になった芭蕉さんの鼻先で手のひらを振つた。

「ほら、いつまでそんなところに、そんな格好でいるつもりですか」

早くしなさい、と。

急かしてようやく、躊躇いがちに伸ばされた芭蕉さんの手は僕より熱かつた。

ぐ、とやや乱暴に引いて立ち上がらせる。

ぼそぼそとありがとうと言う、芭蕉さんの着物は土に汚れて、水に濡れて、散々な有様だ。

くそー、と悔しがる芭蕉さんは情けなくて、先程まで水を撒きながら詠っていた人物とはまるで別人。

僕が、そのどちらも本当は大切だと、思っている事はきちんと自覚している。

そんな事、本人には絶対に言つてやらないけれど。

理由は簡単だ。

何故なら僕は、数多い彼の弟子の中で一番の薄情者なのだから。

大概ひねくれているのだ。

何の事かと言えば自分自身の事。

一応きちんと自覚していて、でもその上で、この振る舞いを変えることは出来ないのだろうと思っている。

僕は理由はなんであれ、彼の中で一番でいたい。

だからこの位置を、譲るつもりは毛頭ない。

これはそんな単純で愚かな、ただの僕なりの意地なのだ。

いくら暑いからといってそのまましているとみすばらしいんで着替えてください。待ってますから。

言うど、なになに、曾良君私になんか用事？ と何故か異様に嬉しそうに言われる。

てつきりみすばらしい、あたりに突つかかってくると思っていたのでこれはちよつとした誤算だった。

「いえ、わざわざこんなところまで足を運んだのだから、茶の一杯くらい頂こうかと」

でもこれくらいの軌道修正は簡単だ。ただ、思い付いた中で一番ふてぶてしい発言をすればいい。

簡単だ。

今度こそ思った通り、なんだそれ、とあんたは怒る。それくらい、むしろ私が着替える間に用意しといてよ！ と。

その生意気な口元に手を上げて、どうして僕がそんなことしなきゃなんないんですかと無茶苦茶なことを当たり前のように言つてのける。

あんたの中で、理由はなんであれ一番でいたいから、またこんな馬鹿みたいなやりとりを繰り返す。

それを許してしまうあんたもあんただと既に責任の転嫁は行われていて、つくづく自分ほろくでもない何だか満足してしまう。

わかったよ、わかったから、お茶淹れてくるまでちゃんと待ってるんだぞ勝手に帰るなよ！？ と何度も念を押して、芭蕉さんはそそくさと家に入つていった。

その後ろ姿を見送つて、暇つぶしに先程まで芭蕉さんが立っていた庭を眺める。

草や花にまばらに水が乗っていて、きらきらと微かな風に揺れている。

芭蕉さんから奪った柄杓を握つたままという事に気付いて、さて、水やりと片付けくらいでは薄情者の地位は揺るがないかなと、少し考え込みながら足元の手桶を拾い上げた。

「どちらかの都合」

2009/08/20

背中合わせに座り、代わりに顔を合わせないまま部屋の中心。

そのくせやや後方に投げ出した手のひらは互いに重ねたままだから、今、この状況は全くの他人からはどう見えるのだろうかとふと気になった。

相手はもちろん芭蕉さんで、もうずっとぐずぐず鼻を鳴らしていい加減疲れないのだろうかとかとあきれてしまう。

「嫌い、だ。もう」

ようやく口を開いたかと思えば、そんな言葉で。

曾良君なんか、と言うものだから思わず指先が反応してしまった。でもそれだけ。かすかに中指が揺れただけだ。

意識的にゆっくりと、膝上に開いた本をめくる。

新しく現れた字面を追って、口の中で声は出さずに言葉を

転がし目を閉じた。

僕の手の下であんたの手のひらが握り込まれた。

「嫌いだよ、もう、曾良君なんか」

ぜんぜん優しくないし、私のことバカにするし、私よりもちよつとだけだけどかつこいいからムカつくし、ぜんぜん敬つてくれないし。

ぐずぐずと鼻を鳴らしながらあんたはずつとこの調子。

ふう、と僕の吐いた息が思いがけず深かった。

「嫌い」

そうですか、とも言わず右手も振るわず、僕は本に視線を落としたまま無関心な態度を繕い続けている。

芭蕉さんの不機嫌の理由なんかすでに忘れてしまったに決まっている。

いつだって下らないことでへそを曲げ、駄々をこね、僕を苛つかせてくれるのだから。

これではどちらが年上なのかわからない。

大体僕はあんたの弟子であつて、保護者になつたつもりはない。

嫌なら、本当に嫌いだというのならば、ここからさつさと立ち去ればいい。

ここが芭蕉さんの家だとは言え、部屋は他にもあるのだから。

放置されればさすがに僕だって考える。

それなのにあなたは僕を突き放すといった行動にも出さず、ぐだぐだとここに居続ける。

それは甘えではないのだろうか、僕は自惚れてしまうのだ。

僕はこの人に甘えられているのではないかと。

僕の横暴を突き放さないあなたの優しさが僕をつけあがらせている。

わかっていますか？

その優しさがいつでも僕を許し、苛つかせていることを。

もうずっとこの停滞状態のまま。どれくらいが経ったんだろう。

膝上に広げた本はそろそろ終わりになってしまう。

僕は突き放されるのを待っているのに、あなたはどこにも行かずに背中を僕に預けている。

寄りかかってくる背中から伝わる重みがじりじりと気に障

る。

「君、体温低いよ」

責めるような声にはあなたが熱いんだ、と心の中で返して、本を閉じた。

これはあなたの句集だった。

こんな句を詠めるというのに、あなたは今、こんなところで何をしているんでしょうね。

「手、離して」

振り払えばいいんだいっただって。

あなたには、それができる。

あなたはいつだってそれができる。

いっただって、置いていくのはあなたの方だろう。

句集は、あなたのものだった。

あなたが別の誰かと、旅に出たときのもの。

意識的にため息を吐いた。

醜くそして下らない感情だ。自覚して、ため息に溶けてそれがすべて消えてなくなってしまうのにとどうしようもないことを考える。

この醜い感情の正体を知っている。

この名前を知っている。
だからこそ僕は何も言えない、何も言わない。

「曾良君？」

そんな声で僕を呼ぶな。

閉じた本はやたら大きな音を立てて畳の上に転がった。

その音にか、それとも僕があんたに重ねただけの手を握ったせいか。

びくり、とあんたの肩が揺れた。

振り返って、その肩を掴んで振り向かせる。

一度は解いた手を握りなおす。指の痕が残るくらい強く、掴む。

空いた手であんたのあごを掴む。痛みに至む表情、何、と怯える唇を乱暴に塞いでこれ以上は何も言わせない。

至近で見開かれる瞳に恐怖の色を見て喉奥でせせら笑う。

あんたは僕をつけあがらせる。

本当は僕を突き飛ばしたいのだろう、突き放したいのだろう。

胸元に押し当てられた手のひらはなのに、弱々しく布を掴みむしろすがりつくように見えるのだから逆効果だ。

あんたは僕をつけあがらせる。

その優しさがいつでも僕を許し、苛つかせている。

「どうしたの」

瞬きをひとつ、ふたつ。

下らない妄想を振り払いたくて首を振り、握った手を意識した。

この醜い感情の名前とそこから続く欲を自覚して、それでも自己嫌悪さえ抱けない自分に何の感情も浮かばなかった。

ただ、どうしたの、とこんな僕を気遣わしげに呼ぶあんたの声だけが、僕を揺らして不安定にする。

瞑目して、先程読んだ句のひとつを呟いた。

あ、と背後から声もれる。

「嫌いじゃないですよ」

ためらいを振り切り、立ち上がる。

ぼかんと僕を見上げてくる顔を睨みつけた。

「だからあんたは、俳句さえ詠んでくれればいいんですよ」

屈みこんで放り出した本を拾い上げた。

芭蕉さんの不機嫌の理由なんかすでに忘れてしまった。

当たり前だ、だって、不機嫌だったのは僕の方なのだから。

芭蕉さんはその僕に戸惑っていただけだ。

本当はわかっている。

でも謝るなんて事はしたくない、絶対に。

だから。

「魚屋の通りの角に、新しい甘味処ができたみたいですよ」

「え、ほんとそれ」

「嘘を吐いてどうするんですか」

帰る途中にちよつと寄つてみようかと思いますが、あんたはどうしますか。

言つて、差し出した手は即座に掴まれる。

「行くよ、行く行く。当然じゃない」

「じゃあ芭蕉さんのおごりで」

「やっぱりね！ 曾良君はそういうと思つてたよたまには奢れよ君がさあ！」

「無理です、サイフを忘れてきました」

「最初っからたかる気だったの!？」

何それ!？ と高い声を出す芭蕉さんは僕に腕を引かれて

立ち上がる。

まあいいけどさどこか諦めた素振りで支度を始める芭蕉さんはけるりとしていて今までの停滞状態なんかまるで何もなかったみたいだ。

僕だけが気にしている、僕だけが意識している。

本当は何事もこの人にとっては取るに足らないものなのではないか、という仮定が生まれて、やっぱりそのことだけが僕を不安定にさせる。

あんただけだ、こんなに僕を揺らし、崩してしまえるのも、どうしてくれるんだ、とはまさか口に出して言わないけれども。

お待たせー、と能天気な顔にひとまずビンタして涙のにじむ目元に満足し、ほら早く行きますよ、と手を掴んで歩き出した。

戸惑つたような声を出すものの振り払われないうちに安心したことを、僕はあんたに知られたくなかつた。

下らないことばかり考える。

どうしたらあんたは僕のものになつてくれるのだろうと、甘味に浮かれるあんたのとなりでそんな、下らないことばかり考えていた。

繋いだままの手のひらに、甘えているのはきつと僕の方だ

つ
た。

「時雨日の花」

2009/11/28

障子戸を開け放ち部屋に立ちこめる湿気を追い出そうとしてみたものの、結局外の濃い雨のにおいに負けて全くと言っていいほど効果はなかった。

しとしとと降る音に激しさはなく、それでも重たい水の気配で部屋を満たし、雨は昨日の夜から降ったり止んだりを繰り返している。

僕は外に出る気にもなれず暇を持て余していた。細々としたやることはあるにはあるはずなのだが、何となく今日はそんな気になれない。

ため息をもらして適当に、いくつか本を出してきて読むことにした。僕が持っている本など譲ってもらったものばかりで大した量はなく、すべて俳句の本だ。しかしどれも大切に読んでいて、すでにだいたいのものに開き癖がついてしまっている。角も擦り切れて、綴じ紐を自分で替えたものもある。その中でも特に新しげなものがある。なんとなく目に付い

たそれを手に取り開いた。綴られる文章、残された句に、想起される情景はどれも鮮やかで絶対的。天気なども文章に塗り変えられて、雨音がだんだんと意識の外に遠のいていく。もともと僕は雨が好きというわけではなかったから都合が良かった。

代わりに僕は、僕とは正反対に雨の日こそはしゃいで楽しんで笑っていた人のことを思い出した。

当たり前のこともかもしれない。この本を書き、そして僕にくれたのもその人なのだから。

本当は僕は、今朝目を覚ましたときからその人のことを思い出していたけれど、彼を思い出したのはこの本のせいというようにしておきたかった。

今日は雨で、僕は雨が嫌いで、そんな日に外出するなんてもつての他で。

だから昨日から用意して玄関先に置いてある菊の花だつて、無駄にしてしまうつもりなのだからなおさらだった。

時雨咲く、まで呟いて芭蕉さんはその先をあきらめたようだった。

戸を開け放って縁側に陣取ったまま、それからはずっと有

名な古い歌を口遊んでいるだけで句を詠む様子は一切なかった。

僕はずつとそれを聞き流しながら、机に向かい書き物をしていた。

それは先日掃除をしてやったときにたまたま押入の中で見つけた、落書きのに混じる芭蕉さんの句の整理という作業だった。

ほとんどが取るに足らない駄目な句だが、ふと落書きに埋もれてあざやかな、言葉の流れが隠れていた。

意識に風を吹き込むような。苛立ちを一瞬で無にするような、脳内に直接情景を焼き付けるような。そんなものが紛れていた。

雑で汚い字と落書きの群の中からそんな言葉を探して、別の紙に書き出していった。

これほどに煩わしく、同時に楽しい作業はないだろう。

芭蕉さんの言葉をすくい上げるのが僕だということも気分を高揚させた。

だから無為な落書きに苛立ちつつも、淡々と机に向かっていた。ふとおかしな節回しの歌が止んで静かになった。

軽い足音が近寄ってきて、すぐ後ろに落ちる気配。

「ねえ……………今日、雨だよ」

「そうですね」

「紙もしけってるでしょ」

「そうですね」

「墨も滲むよ」
「そうですね」

明日にしようよ、と芭蕉さんが言って、僕の体にそつと両手が回された。腹の前で手を握って、遠慮がちに軽く抱きつかれた。

「そうですね」

上の空に聞こえるように呟いてその実、すべての神経で背中に委ねられる重みを追っていた。

落書きの中にまたひとつ、気に入る響きを見つけた。二、三囁いてその音を味わい、さらりと紙に書き付けた。

書き出しと書き終わり、筆を長く置いた部分の墨が滲んで太くなっていた。

「ねえ」

背中に額が押しつけられて、ぐりぐりと動かされるのがこそばゆかった。

「離してください」

「なんで？」

「この体勢では断罪できないので」

「ひええ何言ちゃってんの！？ やだよ！」

軽く身をひねる素振りをしただけで余計に強くしがみつかれた。背後で硬く身を縮めているのがよくわかった。

その反応だけで満足して、僕はまた芭蕉さんの句の発掘作業に戻った。落書きの山をもう半分以上はさばいた。この調子なら、昼少しすぎた頃には終わりそうだと見当をつけて、昼餉はそのあとにしようと思った。

しばらく沈黙が続いた。濃い雨の気配の中に土のおいが混ざっていた。墨のおいも少し。前髪が重たいのは気のせいだろうか。鬱陶しく感じて指ではじいた。

おそろおそろという風に後ろの芭蕉さんが動いた。構ってもらえないことを知って諦めたのか体の前に回っていた腕が解かれた。

と思つたら、今度は両肩に乗ってきた。右肩の重みはきつとそこにあごを乗せているからだろう。そのまま全体でのしかかるようにして、僕に覆い被さって後ろから手元をのぞき込んできた。

顔のすぐそばに呼吸を感じて舌打ちをしようと思った。

その前にすと指が伸びてきて、手元に書き付けた句を指さした。

あ、それ。

空気を吸い込む気配とともに、雰囲気までもが変わったようだった。

それはひらりと手を返すように自然で大きな変化で、ぴたりと口が結ばれて、十七字の音が落とされた。

書き付けたものとは少し違った。下の句が変えられていて、今、詠んでみせた句の方が圧倒的で、僕はしばらく時間を忘れた。

頭の中をぐるくると、耳元で囁かれた音が巡っていた。

ぎゅうと、首に回された腕の力が強くなった。

瞬きを重ねて、忘れかけた呼吸を取り戻した。相変わらず重い右肩に問いかけた。

「恋句が多いのはなぜですか？」

「え、マジほんとに？ きゃ、恥ずかしい！」

「……………黙りなさい」

筆はすでに筆置きに避難させてあった。

ろくな答えは返らないと思つていたが、こうも予想通りだとそれはそれで苛立つものだ。

先ほどの感慨は跡形もなく消え去っていた。

僕は無理に振り返って、覆い被さる芭蕉さんに指先まできれいにそろえた手のひらを振りおろした。

心地良く小指の付け根あたりがしびれて、のしかかる重みが遠のいた。軽く手をさすりつつ振り返れば畳に突っ伏してめそめそと泣く男がいた。

予想以上にうざかったので相手にするのは止めにして、また机に向かい筆を取った。

書き付けた句のすぐとなり、先ほどの句を添えた。
それからまた作業を続けた。乾ききらない紙の音が外の雨
音に紛れていた。

「雨だね」

思わず振り返ったのは、ぼつりつぶやく声が唐突に空虚な
ものだったからだ。

芭蕉さんは畳の上に仰向けになつて寝転がつて、顔を障子
戸の方に向けて外を見ていた。

両手を広げ、見苦しくも両足を開いているものだから着物
の裾が翻っている。
ゆっくりとかすかに胸が上下しているのが見て取れた。

閉じこめられたみたいだねって、笑つたようなやはり空つ
ぽなような、茫洋とした声が言つた。

体も、気持ちも。
だから好き、と。

息も詰まりそうなくらい水のおいが濃いのか、ずっと
音がするのとか、寂しい心地がするのとか。ぜんぶ。

生まれ変わったら蛙になりたいなあなんて芭蕉さんが上の
空で言っていた。

この人の上の空はふりなんかではなく本物だ。
僕とは違う。

この人の頭の中には本当に今、雨の世界と蛙しかいないの
がよくわかつた。

僕は筆を置いて立ち上がった。

そして芭蕉さんの傍らに座り込み、手のひらで目を覆つて
上を向かせて口付けた。

舌を差し込み唾液を送る。

予想に反して素直に飲み下し、芭蕉さんの方からねだるよ
うに舌を絡ませてくる。

伸びてきた舌先に歯列をなでられてまた唾液がわく。

唇の端からこぼれてその透明が垂れて着物の襟に染みて色
を深くした。

呼吸が熱を持つのを、腹立たしく、心地好いものとして受
け止める。

上の空の世界に一人でいるのが許せなかつただけだ。

あまり執着はしないように、手のひらを退けてすぐさま唇
を離した。

ひいた糸はすぐに切れて落ちてしまった。

ゆつたりと笑む視線に射抜かれた。

君のために恋の句を詠んであげようか？

年上の大人のように深く、子供じみてきらきらと、期待に満ちた視線だった。

それがとてもきれいなもの、尊いものに思えて、そんなものがすぐそばにあることに寒気がした。

雨の音がずっとしていた。今更それを思い出した。

もう一度手のひらで目隠しをして、唇を合わせることでたぶん僕はあなたから逃げた。

出に、もう思い出すことだって出来ないたくさんの時間。

障子戸の向こうで絶え間無く空と地をつなぐ線の正体はただの雨粒だ。

点と点を繋げば線になる。

あなたの詠んだ句と句とを、繋いでどうにか記憶を手繰る。いつしよに歩いた時間を思えば、今でもとなりにあなたの気配。

す、と僕の手元を指さした声。

君にも詠んであげようか。

あの人は、うそつきだ。

うそつきなんかのために抱く感情なんてない、ないから。

あの時と同じ雨音をきくと僕は今聞いている。

季節も同じだ。同じ時雨だ。

同じ時雨が咲く中で、思い出の中のあの人と同じ姿勢で今、僕は障子戸の向こうの雨のにおいを感じている。

あのとききつと怖かったのは、手に入らないことを知っていたからだ。

手には入ってもいずれ、失くしてしまうものだど知っていたからだ。

結局あの人は恋句なんて僕に残さなかった。

手元に残るのは旅の記録やいくつかの句、いくつもの思い

ひどい、と騒ぐ声を待っていたように思える。

目を閉じて仰向けに寝転がり、絶え間なく続く雨音の中、あなたの声を鮮やかに耳朶に思い返す。

時雨降る度に思い出す。

蛙を見る度にきつと思ひ出す。

僕はこの雨を好きになれるだろうか。

息も詰まりそうなくらい水のおいが濃いのか、ずっと

音がするのとか、寂しい心地がするのとか。ぜんぶ、ぜんぶ。

まだ雨を好きになれない僕はこんな日には外に出ない。
用意しておいた菊の花だって無駄にして、僕はまた今年も、
あなたを参ることができないでいる。

「道のはじめ」

2010/05/31

「旅に出ようと思うんだよね」

何て突然言い出すものだから、

「好きにしたらいんじゃないですか」

言った。

正直師である芭蕉さんの思い付きよりも今焼いている魚の火加減の方が大事だったし、米ももうじき炊ける頃合だった。汁物もこしらえなければ。ただ待っているだけの芭蕉さんと違い僕は忙しい。

夕刻だった。戸口からは細く長く煮炊きの煙が逃げていく。四角く切り取られた空は熟れた赤色で、日は見えないどこかに沈んでいく、今日の終わりの刻だった。僕は芭蕉さんの家で夕餉の支度の最中だった。

芭蕉さんの生活能力をなめてはいけない。生活能力以前に生存能力に問題がある。人間どんなに放っておいても、生きていくために必要最低限のことはするだろうという僕の常識をあつさり覆し、死にそうになつていたこの人を、僕は師と仰いでも良いのだろうか頻りに疑問に思う。

そのせいで僕は今まさに、その芭蕉さんの世話のためにわざわざ家に向向しているのだから。

わざとらしく溜め息を吐いてみたって相手は僕の気持ちを解さない。この苛立ちは通じない。もうとうに承知はしているが、だからといって我慢できるかという、それは全く別の話だ。

深々息を吐き出しきって、わずかな酸欠感と眩暈に酔う。

「曾良くん、ごはんまだー？」

生憎手元には投擲できそうな、手頃に硬いものがなかった。運のいいことだ。

箸をその額に立たせてやっても良かったが、そうしたら魚を返す物が無い。

焦がすのは忍びなかった。せつかくの新物、珍しい僕なりの贅沢をこんなことで無駄にしたくない。掌を握り込んで諦めた。

命拾いしたことにも気付かない芭蕉さんは量の上にひっくり返っている。ごろごろと転がりながら、子供のように食事を急かす。文句を言つてやるのも優しい気がして無視をした。

ばたばたと足が畳を打つ音に混じってまた声が、僕のところまで届く。

「そろそろまた旅に行きたいんだよね」

勝手にすればいい。思つて、しかしこれがただの思い付きでなく本気なら、またしばらく忙しくなるなど考えた。旅支度に宿の手配、金の用意もしなければならぬ。

何よりも付き人を誰にするのか。

この人が旅に出ることはそれなりに大きな事件なのだ。僕以外にも大勢いる芭蕉さんの弟子の間ではもちろん、どうやら世間的に見ても。

俳諧師として旅に出るなら必ず弟子をつけることになるだろう。

次は誰とどこに行くのか。

そこまで思考が及んで、鼻から息をもらした。

意識して口元に笑みを浮かべる。

自嘲だった。僕がそれを考えて何になるというのか。

決めるのは、芭蕉さんだ。それからもつと実力のある兄弟子たち。

きつとそれは僕ではない。

網の上の魚を返した拍子に脂が落ちたのか煙が上がった。染みるような錯覚に目を眇め、米の具合を見るために火から離れる。

旅に出たいという言葉は思い付きではなく、いつの間にか確定事項になっていたらしい。

まさに今日、その意志を芭蕉さんから聞かされることになるとは思つてもみなかったが。

おかげで、本当は共に行こうと、芭蕉さんが自分を選んでくれたことがうれしかったくせにそれを素直に口にすることは出来なかった。

いつものことだ。僕が素直であつた例はない。

芭蕉さんは不満げに僕を見ていたがやがて堪え切れなくても言うようにむずむずと唇を波立たせて、最後にはまた僕に気持ちが悪いと叩かれた。

その前にも僕の放つたちよつと恥ずかしいもの（それにしてもなぜへその緒なのか）で出血したり、帰ろうとする僕を必死に引き留めようと奮闘したりと散々だったのに、懲りない人だ。

多少の罪悪感があったので、素直になれない代わりに茶を
用意してやることにした。

芭蕉さんはうれしそうに湯呑みを抱え、早速舌を火傷した。
文句を言いたそうだったので鋭く睨みつければ結局何も言
わない。

涙目で、唇をとがらせてしきりに茶の表面を吹いていた。

「曾良君は覚えてるかわかんないけどね」

そして話し始める。茶が冷めるまでの口遊びだろうか。僕
は湯呑みに口を付けたまま、ちらりと視線だけを芭蕉さんに
流す。

芭蕉さんは熱心に湯呑みをのぞき込み、なびく湯気を眺め
ていた。

「ちよっと私お腹空いて死にそうになったことあったじゃん。
曾良君が来てくれてね、あわててごはん作ってくれてね」

慌てていない。ただ驚いただけだ。

「美味しかったなあ。それでさ、それから君が結構私の家に
来てくれるようになって……………」

そんなことはない。たまに、だ。たまたま、こちらの方向
に用があったとき。もしくはつい多めに買い物をしてしまっ
たとき。暇なとき。たまに、家を覗いてみただけだ。

『何も要りません。ただ、何か良い句を僕に、詠んでくれた
らいいですよ』

ことりと湯呑みを置く音がやたらと響いた。

芭蕉さんは湯気なんて見ていなかった。霞む湯気を介して、
僕を見ていた。

目元に皺を刻んだ年上の、そのくせきらきらと楽しげに笑
う目が黒く光っていた。

「君が言ったんだよ」

どこまでもおだやかに、見つめられて、笑いかけられて。

「だからいつしよに旅に行きたかったんだ。君にね、いっばい借りがあるじゃない。だからこれから、ちよつとずつ返していこうかなって」

思つたんだ、と。

笑う、あなたの声。

もちろん、覚えている。

忘れるわけが、ないじゃないか。

芭蕉さんはず、と音を立てて湯呑みを傾けていた。

出来るんですか、あんに。どうせまた僕が世話することになるんだから借りは増える一方ですよ。うれしいです。ありがとうございます、楽しみです。

浮かんだ言葉はどれもこれも嘘くさかった。確かに僕の思いのはずなのに、それを芭蕉さんに告げる僕自身を想像してみるとんでもなく違和感がある。

結局は素直になれないのだ。精一杯の努力がこの湯呑みであり、日々の芭蕉さんの世話である。

動くことしかできない。考えることは難しく、言葉を返すことは困難だ。

ならせめて句で詠むことができるかという、それは途方もなく難解なこと。

僕のこの思いを詠むのには、十七字は余りに少なすぎる。そんなに簡単なことでもなく、簡潔にまとめられるものでもなかった。

一晚費やしたって足りないだろう。この、僕のあなたに対する思いは。

複雑で単純、うつとおしくて傍に在りたい。

もつともつと、ありとあらゆる言葉を尽くしても伝えられるかどうかもわからない、途方もなく絡まる感情の糸の一端でも、あなたに握らせることが出来たのならば。

願うことなら簡単なのに、望むものは限りがなくて。

結局は。

僕は、言葉や思いを持て余し、黙り、そつと口を結ぶ。

二人分の沈黙の中で僕は何度か口を開きかけ、止めるとい

うことを繰り返した。

空になった湯呑みを手に芭蕉さんを見ると、だらしない感じに笑われる。

その瞳が深く、夜の光のように楽しげで。

ああ、と温かい物を飲み干すように、溜め息が出た。

許されたのだと、自然に思った。

何も言葉は要らないのだと。

「おかわりがほしいなあ」

今日ばかりは差し出された湯呑みを無言で受け取り、望みを聞いてやることにする。

芭蕉さんを見ている、例えば湯呑みをぶつけてやりたいとか、そういう気分にならなかつたのだからしょうがない。

素直になりたいなどと、思ってしまったのだからもう仕方がない。

素直になりたい気持ちに素直になって、何も言わずに、僕は急須に茶葉を計り入れた。

「あなたに賭け事」

2010/07/20

芭蕉さんが泣いていた。

しかしこれは何ら珍しいことではない。僕の対応としては放っておくか鬱陶しいと断罪するかの一択であり、何も迷うことはない、やれ、やってしまえ、といったような、ごくごく簡単な場面だった。

そうであるというのに僕は、ぺたんこ畳の上、座り込んでうづくまる芭蕉さんの背中をぼんやりと眺めることしかできていない。

伸ばしかけた手が長いこと、何もないとこでさまよっている。

近づくことさえためらわれる、どこか重たく湿った部屋の空気。布ずれの音さえ彼を刺激しそうで迂闊に身じろぐことさえできない。

伸ばした指先の触れる先を躊躇って、ふらり、さまよわせ
たまま持て余す。

ひくひくと、丸まった背中が痙攣するように揺れていた。肩が震えていた。ほんの少しのぞく耳たぶとうなじは同じように赤かった。

ぜえ、とあえぐように息を吐く。

幼子の様にあやせばいいのだろうか。大人の様に触れず、立ち入らず、見ぬ振りをしてまた明日、何事もなかった顔で挨拶を交わせばいいのだろうか。

人の慰め方を知らない、ということが、こんなにも無力だなんて思わなかった。

どうすればいいだろう。彼の、涙を止めるまじないは何だろう。

じり、と指先が疼いた。

じりじりと指先が先の展開を求める。

元来、停滞は好きでない。

どちらにも転がることの出来ない石があったとして、吉と出るか凶と出るか、確率など考える前に蹴り飛ばすのが常だった。

なら考えろ。

そして行動すればいい。

人を泣き止ませる方法。

子供のような、人だから。

童のような戯れを。

「芭蕉さん」

思いついたときにはすでに覚悟はついている。
知らぬうち閉じていた視界が開けた。

意識したときには腕が伸びている。

呼びかけにも気付かぬ風の、項垂れるばかりのその人の、
肩に掌が触れている。

「……………や、」

顕著な震えが伝わるが、それでうろたえるのなら初めから
知らぬ振りでいればいいのだ。

愚鈍な振りは得意であった。それは処世術のひとつだ。

何も見ず感じず考えず。

それは楽なことだから。

それでも、望むことがあるのであれば。

己から動くのでなければいけないよ、と。

教えたのがこの、目の前で涙する人だから。

人の慰め方ひとつわからぬ僕だから。

拒絶を口にされる前に。

触れた手を振り払われる前に。

無理やり掴んで、こちらに体を向けさせた。

畳に着物のすれる音がするが、そんなもの知ったことでは

ない。

相對して、眉に不必要に力の入り、睨みつけられている様
でもあるその目を、至極真剣な無表情でもって迎え入れた。

「にらめっこをしましょう」

「……………へ？」

芭蕉さんが目を見開いた拍子にまた、つるりと片方だけ涙
が頬を滑る。

あこの先からばたばた垂らして、着物の襟口に濃く染みて
いる。

その喉元ばかり見つめたままぐいぐい芭蕉さんの体をひい
て、向かい合わせ、膝をつき合わせて正座させる。

言い切った僕の言葉に効果があったのか、どこか呆然とし
た様子の芭蕉さんはされるままになっている。

僕もきちんと座りなおして居住まいを正し、ゆっくりと、
視線を上げる。

呆けている芭蕉さんに、

「それでは、いきますよ。歯を見せても、目をそらしても、

泣いても負けです」

「え、ちよ………ええっ?」

「にらめっこです、はい、いち、にいさん」

じ、と芭蕉さんの目を見据えた。

じつと芭蕉さんを見たまま、動かない。

芭蕉さんはすぐそわそわと体を揺らし、肩を持ち上げる。

緊張したときのくせ。

そろり、と目をそらそうとするので芭蕉さんの顔を両手で
はさんだ。

手がじん、と痺れて、派手に鳴り響いた音。

だつ、と、言葉にならない潰れた悲鳴を芭蕉さんがあげた。

目を閉じようとするので、させない。

顔を両手のひらではさんだまま、瞼を指で強く押さえる。

乾いた目元だ。しわのだからの、それでも笑ったときに深

く刻まれるしわなら、その形を愛しいと思う。

その形を見せて欲しいと思う。

でも慰め方も、人の笑わせ方もわからない僕は。

せめて、少しくらいの素直さを差し出してやろうと思った。

「好きですよ」

い。 ありがたく思え、こんなこと、年に何度もあるものでもな

「好きです」

額がぶつかるくらいに顔を寄せた。

「僕はあなたを大切に思っています」

批判、悪口、嫌がらせ。

それがなんだ。そんなものがなんだ。

守れなかった己の不甲斐なさも歯がゆい。悪意にあなたを

さらしてしまった己の未熟さが許せない。

でも、それを棚上げしてでも思う。

そんな、小さなことがなんだ。

あなたが見ているのは、見ていたいのは、もつと広くて大

きなことなのでしょう。

どうか気に留めないで。足をとられてしまわないで。

自分勝手にいい。腹が立つけれど、あなたのわがままは本

当のところ嫌いではない。

僕には描けない夢を描き先を見る。

その姿勢に惹かれたのだから。

どうか。

「誰が何を言おうとも、僕は、あなたが好きなんです」
だから。

「笑え」

指で押さえた脛が痙攣して、それは目が乾いたからかもしれない。

近い距離でその乾いた目を覗き込んで見据えて睨みつける。僕は正座なんかしてなくて膝立ちになり芭蕉さんに額を押し付けている。

僕で影になっっているのにその、乾いた目の色は明るかった。やがて脛の痙攣は大きくなり、あつさりと、僕の指を抜けて腫が見えなくなってしまう。

気が付いてみたら痙攣しているのは脛だけでなく、頬の筋肉とか、肩とか、色んなところが小刻みにふるふると震えていた。

突然芭蕉さんは僕を両手で突き飛ばして、ひー、とか、そんな変な悲鳴を上げて顔を両手で覆ってしまった。

突き飛ばされたと言っても所詮は芭蕉さんだ。その力はたかが知れている。

僕はよろめくこともなく、それでも少しは芭蕉さんから身を離す。

芭蕉さんは顔を両手で覆ったまま、じたばたと、足を暴れさせてごろごろ畳の上を転がり始めた。

「ちよ、ま、たんま………まって待ってひどいそんなのそんな、急にそんなつ、真顔とかつ、ない、よ！ ……あああああ」

じたじた、じたじた。

顔を隠して転がり続ける芭蕉さんはやがて、

「は、ははははははっ、や、だつて、そんな曾良君………つ、キャラとか、に、にせものつ………つぶはははは！」

腹ばいになって相変わらず足は交互にばたつかせて、右手で畳をばしばしたたいて笑い出した。

大笑いだった。何か言っている。けれども途切れ途切れで通じない。左手は腹を押さえて体の下敷きになっているらしい。

着物の裾が捲くれ上がって裏の汚れた足袋だけでなく、見苦しいふくらはぎまで丸見えになっている。

僕はまた正座に戻り、芭蕉さんが落ち着くのを待った。芭蕉さんは死にそうになりながら笑っているの、見るだけで心が和んだ。

「っ、ひーっ、く、苦しい……………」
「そうですか」

笑いすぎだと思わないでもない。
失礼だろ、とか。

でも、これでいい。
あんなふう泣かれるよりはよっぽどましだ。
そうだろう？

特に自分の中で反論はなかったので、これでいいと思いつつおぼろげにうつつすらと口元が、笑んでいるような気がしたけれど。確かめる気もないし見ている人もいないので、気のせいだということにしておいた。

ぜいぜいと肩で息をしてひどく消耗した芭蕉さんは、両手をついてぐったりとしていた。

「で、にらめっこなんですけど」

「あ……………え？ はあ、そ、そうだっけ？」

「僕の勝ちでいいですよ」

「うう、ま、まあそれはそうなんだけど」

「じゃあ勿論芭蕉さんは僕の言うことをひとつ聞いてくれま
すよね。だって僕が勝ったんですから」

「え、ええ？ そんな話だったっけ？」

「芭蕉さんが負けたんですから」

「ま、まあ、それはそうなんだけど……………」

「じゃあ聞きなさい」

「はい……………」

芭蕉さんがおどおどとこちらを見ている。

何だか叱られた子供のようだった。

そのまま叱ってやっても断罪してやってもいいような気も
したが、残念なことに、今日の僕は機嫌が良い。

だからごくごく簡単な望みに留めておいた。

「接吻してもいいですか」

ぱちり、ぱちりと芭蕉さんが大きく瞬きをする。

それからなにやらぼそぼそと、別に、いいけど、なんて歯
切れの悪い声で言っていた。

本当はこんな提案、相手を喜ばすだけだっただけのことくらいわかっていたけれど。

何となく、気分がいいので。

たまにはこんな日があってもいいだろうと、やや強引に考えることを締め切って腕を伸ばす。

今度は簡単に、芭蕉さんに触れることが出来て、そつと目の笑いじわを指でおしのばすようになぞっていた。